

「成功するための教育」を掲げた文化は、不誠実な生き方を教える
楽観主義による絶対支配

著者	ステファン・フフィン Stefan Chwin (訳: Anna Kunert)
所属	作家
アイテムタイプ	エッセイ (Forum Poland Online Database: FPOD)
URL	http://www.forumpoland.org/chwin01.pdf
発行年月日	2001年
Copyright by	<i>Rzeczpospolita</i> , Chwin, Stefan
初出	<i>Rzeczpospolita</i> (2001年7月14-15日号、第28(446)号)

(このエッセイは日刊紙 *Rzeczpospolita* (2001年7月14-15日号、第28(446)号)の付録『+PLUS -MINUS』に掲載された「Kultura nastawiona na “edukację dla sukcesu” uczy żyć w kłamstwie. Tyrania optymizmu」を筆者と *Rzeczpospolita* 編集部の許可を得て翻訳・転載したものである。この場を借りて筆者と編集部に感謝の意を表したい。)

今日、ポーランドの学校、特に有名私立校における不文律の教義は、成功するための教育、を施すことである。もちろん、どのようなやり方であろうと若者には勉強してもらわなければならない以上、これにもそれなりの道理はあるだろう。けれども、どんなクラスであれ成功者の仲間入りをするのは、25人の生徒のうち、ほんの2~3人に過ぎない。残りの生徒たちは、ある程度の惨めさの付きまとう人生を送ることになる。これは、仕方のないことだ。はっきりしているのは、大体において生徒の四分の三は、スタートラインに立った時点ですでに成功から見放された運命を担わされている、ということだ。

このような状況にもかかわらず、野心（要するに成功欲）を煽ろうとするのは、無意識のサディズムであると思えない。若者たちは、「全力を尽くせば、君たちはトップに立てるのだ」と吹き込まれる。けれども、靴磨きでも百万長者にのし上がれる、という神話とは裏腹に、実際に自由市場経済の社会で成功するために一個人の出来ることなど、ほんのわずかなのである。労働市場は、拡大どころか縮小している（これは主に、最新技術の急激な発達による）。「よいポスト」などと言うものは、すでにそのほとんどが埋まっており、この先も空きが出ることはないだろう。他の多くの国同様、若者たちの大部分は、失業手当などの補助金を頼りに生活したり、または面白くもない仕事に従事して生計を立てるようになるだろう。

しかし、問題なのは職業上の成功だけではない。若者のほとんどは、私生活においても部分的な成功を収めるに過ぎないだろう。「一生懸命努力すれば、全てうまくいく」と彼らに言い聞かせるのは、彼らに果敢ない希望を抱かせることに他ならない。

私はこのようなことを考えるたびに、レシェク・コワコフスキ氏¹のかつての言葉を思い出す。それは、今日では刺激的でびっくりするような言葉ではあるけれど、大きな真実をも含んでいる。「真に価値のある文化とは、挫折に耐え抜くことが人間にとって容易になるような文化のことである。なぜならば、我々は挫折から挫折へ渡り歩きながら生きていくのだから」。しかし今日のポーランドでは、「挫折」だとか「人生の敗北」だとか「惨めな生活」などと言う表現は、暗黙のブラックリストに載っている。このような表現は、その存在さえ忘れられるべきだ、と。

私が最近耳にした中で、最も感動した言葉とは何か。それは、チェスワフ・ミウオシユ²の90歳の誕生日に行われた華やかなインタビューの中で、彼が発したある一言だ。彼は、「あなたは成功した人生を手に入れましたか？」と言う質問に対し、ただ一言「ノー」と答えたのである。勝利を収めたノーベル賞受賞者のこの答えにはじっくり考えてみるだけの価値があると、私は考える。彼でさえそうであるならば、私たちは...

「成功するための教育」を掲げた文化は、不誠実な生き方を私たちに教える。それは、あたかも成功者であるかのように装うことを強いたり、何かを達成できないことは恥ずかしいことであると思わせたりするものだ。だから、成功する者と成功しない者を選び分ける第一のふるいとして機能するような学校は、(たとえそれがストレスの最も少ない、生徒本位の学校でさえ)生徒に忌み嫌われてしまうのである。

成功の運命から見放された者が文化によって救われることは、ありうるのだろうか？ 救えるのであればそれに越したことはないけれど、どうすればいいのかが私たちにはわからない。若者たちにどんな勉強をさせるべきなのだろうか？ 彼らだって—私たちみんながそうであるように—人生のある時点で愛するものに裏切られることがあるだろうし、信用していた人に騙されることもあるだろうし、心の中を打ち明けた相手に恥をかかせられることもあるだろう。人に受け入れてもらえないことだってあるだろうし、クビにされることだってあるだろう、無力な状態になることもあれば、屈辱を投げつけられることだってあるだろう。少ししか満足できない結婚生活、少ししか満足できない子供、少ししか満足できない家庭...。これらのあらゆる災難から彼らが無傷でうまく逃れられるためには、どんな能力を彼らに授ければいいのか。

¹ 現代ポーランドを代表する哲学者の一人。哲学史家、随筆家、時事評論家。現在、オクスフォード大講師、シカゴ大学教授。

² 1911年生れのポーランドの詩人、小説家、随筆家、翻訳家。1951年、フランスに政治亡命。1960年以降、カリフォルニア在住。1980年、ノーベル文学賞受賞。

「すると、人生はうまくいかないものだ、端（はな）から決めてかかればいいのか？何と言う悲観主義だ！」中にはこういう人もいるかもしれない。けれども、決めてかかる必要なんてありはしない、だって私たちには何もかも分かっているじゃないか。現在学校の犯している最大の過ちは、楽観主義による絶対支配にあるのだということが。（一生懸命勉強しさえすれば）何もかもうまくいく、という建前だけの絶対支配こそが、間違いであると言うことが。これぞまさしく、本格派人間喜劇...。「成功しなくちゃ駄目だ！」生徒にこう要求するのは、自らは成功から程遠い親たちなのである。「何が何でも、成功しなさい！」生徒にこう要求するのは、離婚した先生であり、カネのない先生であり、絶望している先生であり、校長（幸いなことに、全員がそうではないけれど）や親たちに侮辱された先生たちなのである。そして校舎の上には、成功の亡霊が微笑む吸血鬼のごとく漂っている。学校の価値は、大学進学者数によって、つまり社会のエリート層が形成する小グループに入り込むことの出来る卒業生の数によって、測られる。そして、このグループに入ることの出来なかった残りの生徒たちは、教育機関でさえどうすればいいのか分からないような、恥ずべきお荷物とされてしまう。

学校で教えるべきは、何も達成できない状況の中で、どうやって生きていけばいいか、ということではないのか。この言い方がひどく聞こえの悪いことくらい重々承知しているが、ほかに仕様がな...。19世紀のポーランド文化は、敗北と言う状況の中でどうやって生きていけばいいか、ということを見せてくれたのではないか。ただし、その敗北と言うのは、主に政治的奴隷と言う意味での敗北であったのだけれど。そして1989年以降の私たちは、かつて1918年がそうであったように、コンラッドのマント³を脱ぎ捨てて、自由の太陽を歓迎した。しかし、太陽の光を浴びる一方で、人間の生存において重要な、真実の一部を捨て去ってしまった。「不幸」と言う言葉は、恥ずべき禁句になってしまった。大病の後で部屋をいぶして消毒するように、今、私たちはその禁句をいぶしているのである。大衆文化はこの言葉を好まない。昔は、何かを達成できない状況の中でどうやって生きていけばいいかと言う生きる術は、教会が教えてくれたものだった。しかし今では教会を訪れる若者の数は減り、その代わりカラフルな雑誌やテレビが「成功しない君はゴミだ！」と叫んでいる。これが若者たちにフラストレーションを与え、彼らを攻撃的にする。と言うのは、こんな風に煽られた希望の大半は、決して実現することのないものだからである。最も優秀な人物でさえ、負ける可能性はあるのだ。教育の神話は、単なる錯覚に過ぎない。教養は何も保障してはくれないのに、私たちはそれが自分たちの子供にとって幸福へのパスポートになり得ると、必死に信じようとしているのである。パスポートになることもあれば、ならないことだってある。けれど、どんなにすばらしい学位を持っていても、運が悪けりゃ何もうまくいかない。

³ ポーランドを代表する19世紀の大詩人、アダム・ミツキエヴィッチの叙事詩『コンラッド・ヴァレンロッド』の主人公のまもっていたマントを指す。この作品は、主人公が祖国に平和をもたらすために敢えて敵軍のドイツ騎士団長になり、祖国を勝利に導く、という筋。

ポーランドの学校は、もうずいぶん昔から、本格的な人生に備えて精神を教育するための場ではなくなっている（とはいえ、かつて学校がこのような場であった試しがあったのだろうか？ ゴムブロヴィッチ⁴は疑問に思っていた...）。学校を支配する楽観主義テロリズム、それは自分の子供が負かされることを決して承知しない親たちが、教師を脅した結果生じたものでもある。決して負けることのない子供にすること、それが教師の仕事なのである。悪循環だ。

損をするのは誰か？ 最終的には、全員である。「成功した人生を歩め！」しかし多くの若者が直面するのは、部分的な成功か、はたまた完全に失敗した人生であろう。このような人生に直面して、それを精神的に処理できると言うのは、実に偉大なことだ。けれども、今、誰がそれを教えてくれるのか。学校も、家庭も、アルカノエゴ⁵がニコニコと嬉しそうに歌を歌っている教会だって、教えてはくれないのである。こんな世の中では、人生に躓いた人は穴があったら入りたい気持ちにもなろう。彼らは、成功しない人生なんて意味がないと教えられたのだ。後に残されるものは、屈辱感である。羨望である。敵意である。または、人生そのものを忘れてしまいたいと言う思いである。人生からの離脱。諦め。そして、絶望。

言うまでもないことだが、「成功するための教育」を「敗北のための（あるいは、惨めな生活のための）教育」に置き換えるのはばかげたことであり、私はそんなことを考えているわけではない。しかし、両者をうまく結びつけることには、価値があるはずだ。必要なのは、正当なバランスだ。

満たされない人生に意味を与えるのは、人文科学の科目が担うべき役割であり、人文科学はもっと現実の人生、つまりよくない人生に近づくべきである。満たされない人生について深く考え、その人生を受け入れることは、何でもかんでも 100% うまくいくと信じている人にとっても役に立つはずだ。

なぜなら、人間と言うものは、たとえ人生が満たされていない状況に置かれていても、その中で何とかして自己実現をすることが可能な存在であるからである。ただし、人の自尊心を踏みにじってそのチャンスを奪うことだけは、してはならない。このような、バランスの概念と言う教育目標を、果たして学校は受け入れるだろうか—それが、問題だ。と言うのは、私たち自身が日頃から、学校とは何よりもまずキャリア製造機であるべきだと、当然のように考えているではないか。さらに加えるならば、成功神話を頭にぎっしりと詰め込まれた生徒たちが、彼らを待ち受けている現実の人生について、深く考え

⁴ 1904年生れのポーランドの作家。1939年以降、20年以上をアルゼンチンで過ごした。

⁵ ポーランドの児童によって編成された合唱グループ。

たり話したりしたがるであろうか？ また、親たちはどうであろうか？ 満たされない人生をどうやって生きていくべきか、などということ教えるような学校に、(高い金を払って) 子供たちを通わせてがるであろうか？ とても、そうは思えないのだが...

ここに書いたことが今の時代精神にそぐわないと言うことは、私も十分承知している。それでも、書くべきことだけは書いた、ということに対して、ささやかな満足感くらいは得られるように思う。

【筆者】 ステファン・フフィン (Stefan Chwin) 1949年グダニスク市生まれ。グダニスク大学の研究員。散文作家、随筆家。批評文、歴史文学等に関する著作あり。ジュニア向け空想冒険小説も手がける。コシチェルスキフ賞、及びドイツの文学賞であるアンドレアス・グリフィウス賞受賞。

*このエッセイに対して国内で大きな反響があり、その一部が *Rzeczpospolita* 紙に掲載された。以下は記事に対する賛否両論の抜粋である。

男性・47歳・ワルシャワ在住 (抜粋)

若い人たちに、成功した人生と言うのは、大企業の社長になって高い車に乗って贅沢な屋敷を手に入れることだ、と言い聞かせるのはいいことではない。しかし、若い人たちは、大企業の雑用係になったところで一生かかってもアパートさえ手に入れられないことも、そうなれば40歳になっても母親と同居しなければならないことも、外国旅行などと言うものは働いているときはもちろん、退職してからさえ行けはしない、ということも、ちゃんとわかっている。

エリートとしてのキャリアを積めるのはもちろん数人だけだが、人間は誰だって夢を持ちたい。ポーランドでは消費主義を標榜する資本主義社会になった。だから、成功しなかった者は天国に行って幸せになる、と言う教会を誰も信用しないだろう。もはや世は中世ではないのだから。

男性・ラヴァ・マゾビエツカ在住：この夏、高校を卒業したばかり (抜粋)

フフィン氏の記事を読んだ後で、僕は「成功は、成功と同等ではない」と言う結論に到達した。僕にとっての成功とは、僕の間人としての尊厳とか自尊心とかと密接な関係を持っていると思っている。

学校は、大人の人生に入っていくための覚悟とか、自分の才能をどうやって見つけるかとか、自分をどうやって実現すればいいかとかを、教えるべきだと思う。僕は、このような学校と成功を支持してい

る。しかし、フフィン氏も言っているが、現在このような教育上の成功と言う概念は、自由市場経済と物質主義によって駄目にされてしまった。

敗北の教育を成功のための教育と結びつける、とフフィン氏は言っているが、私はそうではないと思う。人間にとって成功とは何であるかを改めて考えるほうが、重要であると思う。

女性・カルチェフ在住：神学とジャーナリズムを卒業（抜粋）

成功の定義は広い。それは、必ずしもよいポストやお金を手に入れることだけを意味するわけではない。ある分野で自分を実現する可能性も含んでいる。

確かに今は、学位は何も保障してくれないが、私は記者が書いた敗北に対しては大反対である。私は、敗北を乗り越えやすくし新しいチャンスを探しやすくするためには、謙遜の心を学んだほうが良いと思う。

また、私は訳のわからない幸運も納得しない。地道に仕事をすれば実りがあると、絶対に信じている。

女性：ヤギエオ大学で博士論文準備中（抜粋）

この記事に非常に感動しました。記事の中に出てくる問題は、日常的に接することです。私は、社会的に成功をしなければならないと言うことを自分でも非常に感じています。この成功とは、精神的なものではなく、物質的なものを手に入れる、という意味での成功です。

フフィン氏は、成功しない状況の中でどうやって生活していけばいいのかを、学校は教えてくれないと書いていましたが、私は、成功したときの人生をどうやって送ればいいのかさえ教えてはくれない、と言う一言をさらに付け加えたい。キャリアのある人たちを見ていると、彼らは何かを知らないことを必死になって隠そうとしたり、能力のないことを隠そうとしていて、それを見ているとショックを受けます。まるで高いポストに就いたら、ミスしてはいけないと考えているかのようです。

ポーランドの教育制度が犯している過ちは、両親が犯している過ちでもあります。それは、成績によって子供たちの価値を決めようとする事です。成績表に6〔訳注：成績の最高評価〕が沢山あれば、それが人間として素晴らしいことであると言ってるようです。でも、そういう人たちは、失敗するとその時点で自分を価値のない存在だと考えてしまうものです。けれど、失敗するからこそ、人は自分をより磨いてより成長しようとするのではないのでしょうか。

男性・大学教授：ワルシャワ在住（抜粋）

今では教会も家庭も学校も（成功しない状態でどう生きるかを）教えてくれないと書いているが、それは言いすぎだ。学校と家庭は別としても、ここに教会を加えるのは間違いだ。神父たちは、市井の人々に、どうすればいいかを教えてくれているのではない。教会は役割を果たしているのだ。

筆者のようなポーランド文化のすばらしい代表者である人物がそれを理解できないなどということが、どうして起こりうるのだろうか。今や、あの文化がどれほど世俗化されたかを示す例である。

人間を助けることが出来るのは、宗教的価値と統合された文化である。つまり、宗教の場所を不器用に奪おうとするような文化ではなく、宗教と一体化しようとする文化である。

ルブリン大学英語学科勤務・米国人：現在ポーランド国籍を申請中（抜粋）

私が思うに、もしポーランド社会に何か足りないものがあるとするならば、それこそ楽観主義であり、楽観主義と係わる人生に対する全体的な満足感である。これがないと、社会的な発展は難しい。

ポーランド社会における人生の満足度のレベルを上げるために、何かよい方法があるだろうか。確かに西側から取り入れた成功のモデルは浅すぎる。

フフィン氏は、かつては教会が人生に適応する手伝いをしてくれた、と書いているけれど、アメリカ人のような楽観的な国民が一番宗教熱心であると言うのは面白い。これは、現代的であると同時に宗教的であることが可能であることの証拠である。ある調査によると、人生の満足度のひとつの指数が、宗教にどれほど熱心であるかによる。

ポーランドのカトリック教会は、ポーランド社会の楽観主義を何とかして強化することが出来るだろうか。